

キーワード：情報モラル、メディアリテラシー、ネット依存、コミュニケーション

## I 研究について

### 1 研究テーマ

I C Tの効果的な活用を通して、学習への興味・関心を高め、主体的に学ぼうとする児童の育成～行動と言動に責任をもち、情報を正しく安全に利用しようとする児童の育成～

### 2 テーマ設定の理由

現代はG I G Aスクール構想のもと、1人1台タブレットが配備され、教育環境が大きく変容している。今後、これまで以上にI C Tを活用し、Society5.0時代を見据えた取り組みを推進していく事が求められている。また、一方で児童がインターネットに手軽に接続できるようになったことから、今まで以上に情報モラル教育の充実が求められている。

本校児童はタブレットを使って学習したいという意欲が高い。一方で、長時間利用や、S N Sやオンラインゲームでのトラブルが毎年のように問題となっている。

そこで、I C Tをツールとして効果的に授業・学習で活用する機会や情報モラルについて必要な知識・体験を積み重ねる機会を設定すれば、主体的に学ぼうとする児童や行動と言動に責任をもち、情報を正しく安全に利用しようとする児童を育成できるであろうと考え、本テーマを設定した。

### 3 実態と課題

#### (1) 児童及び家庭

ネット・SNS利用実態アンケート結果から、利用時間が高学年になればなるほど増えている。6年生では平均で平日5時間以上利用する児童が12%、休日5時間以上利用する児童が37%となった。

利用についてのルールを決めていると答えた家庭は、1・2年生では高い(99%)ものの、5・6年になるに従って、割合は低く(63%)となっている。1・2年生のアンケートは親が回答し、3～6年生は子どもが回答していることから、親が決めているのに対し、子どもは決まっていないと思っていることが分かる。また、年齢が上がるにつれて、利用範囲が広がり、利用内容が複雑化するので明確な決まりを決めづらい状況があることも推測される。

フィルタリング機能について使用していると答えた家庭は全校で49%程度。6年生では29%と低い値とであった。フィルタリングとは何かを知らない児童も多数いた。

高学年では、授業参観時などに外部講師を招いての「情報モラル教育」を行っていたが、保護者の参加人数は少なく、啓発が十分行き届いていない。

#### (2) 教職員と教育課程

教育課程上、「情報モラル教育」は学級活動や総合、道徳の時間に位置付けられているが、指導方法が具体的ではなく、系統性も明確ではない。よって、「教え方が分からない。」「何をいつ教えたらよいか分からない。」と感じている教職員も多かった。

#### 4 課題解決のための手立て

##### (1) 教育課程の見直し、情報モラルカリキュラムの作成

- ・指導する時期、内容について協議し、カリキュラム例を作成する。

##### (2) 指導内容についての研究・研修

- ・指導する内容や教材、普段の授業での指導などについて取り上げ話し合う。

① 7月13日(火) 第1回全体授業 6年1組(情報モラル)

② 10月22日(金) 第2回全体授業 2年2組(ICTを活用した授業)

③ 11月19日(金) 第3回全体授業 6年1組(情報モラル)

##### (3) 保護者への啓発

- ・授業参観、保護者会での啓発を行う。
- ・学校便りやHPで情報モラルについて取り上げ啓発を行う。
- ・情報モラル授業後、ワークシートを保護者と共に行う。

## II 研究の実際について

### 1 校内での実践

#### (1) 「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」\*<sup>1</sup>を活用したカリキュラムの作成

文部科学省が提供している「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」を用いて、カリキュラムを作成した。

本教材は①ネット依存、②ネット被害、③SNS等のトラブル、④情報セキュリティ、⑤適切なコミュニケーションの5つのカテゴリーで20本(令和3年度現在)の動画教材がある。また、それぞれにモデル指導案、板書例、ワークシート例等もありすぐにも活用できる教材である。

教材それぞれを、どの学年で活用していくかを明確にすることで、確実に指導できるようにした。また、小学校段階だけでなく、中学生、高校生向けの教材もあるので中学校へつなげていく事も意識して作成した。

しかし、学年で指導内容を固定してしまうと、実態に応じて指導する事が難しくなり、効果的ではなくなる可能性がある。あくまでも目安として、そのときの実態に合わせて指導できるよう、◎印と○印とを用いて、指導する学年や内容に幅をもたせた。

(資料① 文部科学省「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」を活用した情報モラル教育カリキュラム)

### 2 校内研究会での実践等 (ICT活用)

#### (1) 第2学年 算数科「さんかくやしかくの形をしらべよう」の実際 (10月22日)

- ・タブレットの写真機能を使って、校舎内の三角形や四角形を撮影し、共有する
- ・三人一組で行う(お互いに助け合い、意見を述べ合う)
- ・相手に伝わりやすいように撮影するにはどうしたらよいか考えながら撮影する。
- ・撮影してよいところと、いけないところ、許可が必要などところなどを考える。


<sup>1</sup> 情報化社会の新たな問題を考えるための教材

(2) 第6学年 学級活動「スマホ・タブレット・ゲーム・ネットの上手な利用方法」の実際  
(7月13日)

①本時のねらい

日常生活を振り返り、自己の現状に気付けるようにすると共に、スマホ・タブレット・ネット・ゲーム依存のリスクを知り、けじめをつけて利用する態度を養う。

②学習過程と児童の様子

観点	学習活動 内容(●) 留意点(○)	児童の発言、様子 他
導入	1 アンケート結果を確認する。 ○ゲームやネットに費やしている時間が多いことを確認する。 ○家庭によって約束も違うことを確認する。	「個人や家庭によって利用時間が大きく違う。」 「利用時間の多い人もいれば、全く使っていない人もいる。」
展開	2 動画教材を視聴し、やめられなくなる理由を考える。 ・問題点とその原因を考える。 ○「ネット依存」、「ゲーム依存」、「ゲーム障害」について取り上げ説明する。 ○やめられない原因には、「ゲーム側の要素」と「人側の要素」が絡み合っていることを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">             「ネットやゲーム」をやりすぎない、使いすぎないためにはどうしたらよいか考えよう。           </div> 3 やりすぎ・使いすぎについて話し合う。 ・何時間からやりすぎか(時間) ・どうなったらやりすぎか(状態) ○「カード分類比較法」をグループで行い、自分の考えを発表出来るようにする。 4 解決方法にはどんなことがあるか全員で話し合う。	「ゲームは1度始めると時間の感覚が分からなくなる。」 「友だちとオンラインゲームをやっていると途中でめげられない。」 「ゲーム障害にはなりたくない。入院しなくてはいけないのは嫌だ。」  「やりすぎの時間も人によって違う。自分はやりすぎているのかもしれない。」 「自分の言動は依存症に近いのかも知れない。」 (自分事として考えられていた)
まとめ	5 自分の解決方法を考え発表する。 ○ワークシートに自分の考えを書き、おうちの人と相談してから、目標が決定する事を伝える。 ○形骸化しないように定期的にチェックできるようにワークシートを工夫しておく。	「タイマーをセットする。」 「親に時間を教えてもらう。」 「親とよく話し合っただけで利用時間や、利用のルールを決めていきたい。」 「タブレットでの学習は利用時間に入れないでほしい。」

③事後の活動


保護者と一緒に、各家庭でワークシートを基にルール作りを行った。その際、どのように話し合ったらよいか、保護者向けの記入例も添付した。

(3) 第6学年 学級活動「楽しいコミュニケーションを考えよう」の実際（11月19日）

①本時のねらい

ネット上では「誤解」が生まれやすいことや、自分と相手の考え方に違いがあることに気づき、それらを踏まえた上で自分の気持ちを上手に、相手に伝える方法を考えられるようにする。

②学習過程と指導の様子

観 点	学習活動 内容（・） 留意点（○）	児童の発言、様子 他
導 入	<p>1 アンケート結果を確認する。 ○コミュニケーションの悩みはほとんどの人が感じたことがあることを確認する。</p> <p>「楽しいコミュニケーション」をしていくためにはどうしたらよいのだろうか。</p>	<p>「友だちや家族とけんかしたことはあるけれど、ネット上のトラブルはまだない。」 「炎上や誹謗中傷という言葉は聞いたことがある。どうして起こるのか知りたい。」</p>
展 開	<p>2 コミュニケーションが必要なときを考える。（アイスブレイク） ・からい食べ物といえば何？ ・夜遅い時間といえば何時から？</p> <p>3 やってみよう①あなたとみんなの「イヤな言葉」 ・5つのカードから自分が言われて一番イヤな言葉を考える。</p> <p>4 やってみよう②「おもしろいね」をどう伝える？ ・文字だけのコミュニケーションの危険性を考える。 ・ネットの特性についてまとめる。</p> <p>5 こんな時、どうする？「トラブル対応」 ・実際に怒った相手からの返信にどう返すかを考える。 ○実際に会話のやりとりを疑似体験することで自分事として捉えられるようにする。</p>	<p>「同じ質問でも、人によって答えが違う。」 「なんで？と思ったときに話し合いたくなる。」 「言われてイヤな言葉は人によって違う。」</p>  <p>「文字だけのやりとりでは誤解が生まれやすい。」 「バカにされたようなメッセージが来ると腹が立った。」</p>
ま と め	<p>6 「楽しいコミュニケーション」にしていくために気を付けることを考え発表する。</p>	<p>「誤解されないかどうか確かめてからメッセージを送りたい。」 「相手の気持ちを確かめたいときは直接話した方がいい。」</p>

③事後の活動

ワークシートを通しておうちの人に授業内容を知らせることで、自己の理解を深めるとともに、保護者を含め、家庭でも気を付けられるようにした。

#### (4) 研究協議会の様子

##### ① 7月13日「上手な利用方法」の授業



- ・動画教材を通してネット依存の状況、危険性を客観的に学ぶことができた。
- ・カード分類比較法によって、意見交換が活発に行えていた。

講師 医療創成大学 心理学部教授 中尾 剛 先生

- 利用時間が長くなる長期休み前に行くことが重要である。
- 親と話し合っ決めて決めること、定期的に振り返って確認することが大事。

##### ② 10月22日「算数科におけるICTの活用」の授業

- ・低学年から写真機能は活用できる。撮ってよいもの、よくないものがあることを、実際の活用を通して学べた。
- ・うまく伝わる写真にする（誤解のないようにする）にはどう撮ればよいのか、考えながら撮影している姿が見られた。
- ・普段の授業の中でも情報モラルについて指導していく方法を学べた。

##### ③ 11月19日「楽しいコミュニケーション」の授業



- ・中学校の先生にも参観していただき、指導方法や指導の重要性を共有できた。
- ・カード分類比較法によって、自分と他者の感じ方の違いを実感できていた。
- ・メッセージのやりとりを疑似体験することで実際にトラブルが起こった際にどうしたらよいのか自分事として考えられていた。

講師 医療創成大学 心理学部教授 中尾 剛 先生

- 学校内での温度差をなくすことが大事。誰もが実践できるように。
- 子どもたちは居心地のよい（自分の考えを受容してくれる）場所を求める。ネット上ではなく、現実の学校も居心地のよい場所に。

## Ⅱ 成果と課題について

### 1 成果

- 「情報モラルカリキュラム」は系統性もよく分かり、指導内容も明確でわかりやすく、実践しやすくなった。
- 「情報モラル」の授業ではカード分類比較法がとても効果的だった。友だちとの違いに気づき、積極的に話し合うためのツールにもなっていた。また、自分事として捉える機会にもなった。
- 「ICTの活用」の授業では、機器を活用しながら、モラルについても学べる機会となった。日常使いの中で、適宜モラルを教え、考えていく授業のよい参考になった。
- 「保護者を巻き込むワークシート」は特にルールがあいまいだった家庭について、親子で考えるよいきっかけとなった。
- 指導内容や指導教材を、研究授業を通して紹介したことで、何をどのように指導していくのかを具体的に示すことができた。
- 「ネット診断利用サービス」のアンケートを6月と2月に行った結果、合格ラインの80点以上が11名（6月）から15名（2月・1名欠席）に増えた。また、50点以下はいなくなった。家庭でのルールはないと答えた児童は5名から1名に減った。

### 2 課題

- 「情報モラル指導カリキュラム」は、児童の実態に合っているかどうかはよく考えながら実施しないと、自分事として捉えにくくなる可能性がある。
- 発達段階や、生活経験の違いから、自分事として捉えにくい児童もいる。学校で体験しながら、実態に合わせて指導しなくては効果が薄くなる。
- 情報モラルの授業単発では、児童の意識が劇的に変わるものではない。タブレットを活用する各教科等の場面でも実施する「活用型情報モラル」の中で、リスクを自覚させ、考え続けさせる必要がある。また、メディアの長時間利用については、長期休業前などに継続して行っていく必要がある。
- 「コミュニケーション」については、ネット上だけでなく、日常のモラルも大切になってくる。普段の友だちとの関わりの中で、自分の言動について考えていけるよう継続して指導が必要である。
- 保護者の認識には個人差がある。今日の前の児童に、メディアリテラシーの重要性をしっかりと学ばせることが大切である。
- 「ネット診断利用サービス」のアンケートを6月と2月に行った結果、情報モラル、セキュリティ、法の3分野とも正答率は上がったものの、使用状況、利用時間においては改善が必要という児童が数名いる。パスワードについての正答率は低いままであったので改めての指導が必要。